

## 中川花代先生をお訪ねして

赤間峰子

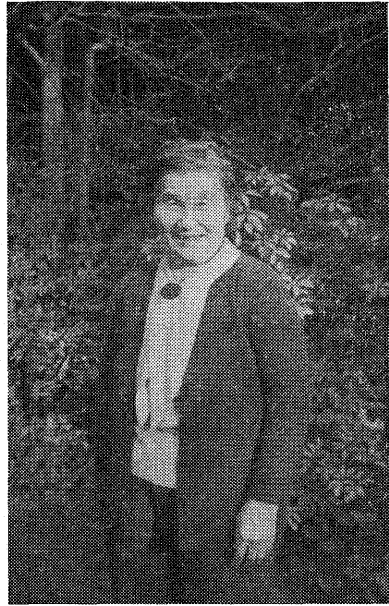
前回の白石トク先生につづいて、荻窪幼稚園の中川花代先生をお訪ねして、やはりどこか一本筋の通った大先輩のお話には、私はまたもや「かぶとをぬぐ」というよりも羨望に似た気持ちでいっぱいになりました。私はいつものことながら心の準備もせずに行きましたのに、先生はまことに快く次から次と、楽しそうにお話をきかせて下さいました。

まず私は保育者の道をお選びになったそもそのところからお話しいただきたいと申し上げました。

先生は山口県のお生まれで、来年は八十歳におなりの由ですが、とてもそんなお年には見えません。その昔、女学校を卒業後、型通りの花嫁修業がどうしてもいやで上の学校に入りたいとお父様にお願いになったそうです。先生は内心、広島女学院（いまの聖和の前身）を望んでおられたのですが、上の学校はもちろん「ヤソの学校など」となかなかお許しが出なかったそうです。そんな時にご親戚に「あんなお家柄のいい方がヤソに……」と噂

されたほどの小母さまがおられて、その方のお口ぞえでついに先生は念願の広島女学院保母師範科に入学なさったのだそうです。それだけの熱意をもって入られただけに、「ただもう楽しく……」と心から楽しそうにその学校時代のことを話されるのです。

校主の西村精一郎先生とおっしゃる慶応義塾とコロムビア大学ご出身の先生は、教育学、教育史、心理学等、思想的なことを教えて下さいました。そして中でも特にフレーベルの思想やら生い立ちを私を感激させました。思えば、これが私に幼稚園の先生になりたいたいという決心をさせたといってもいいのではないのでしょうか……。ところがこの先生は、校主でいらして事務の方もいろいろご多忙でとかく休講が多い。それで私は少々ほかの生徒よりも年が上であったこともあり、若かったのですね。「まだこれだけ教科書におならいしていないところが残っているのはおかしい」と冬休みに補講を願う抗議を行いました。そしてもちろん、この



先生はこれを承知して下さったのです。

このほか、真鍋由郎という博物の先生もなかなかの人格者でいい先生でした。近くの河原でいろいろな物を採集したりして、実物を使つての授業、わざわざお魚を煮ていらしてその骨を数えさせたり、かえるの解ぼうをさせたり、顕微鏡を使つて未知の世界をのぞく等、ためになりかつ楽しいものでした。殊に「桜の花が散つたあとを見てごらん、すぐにもう来年の花のつぼみができていて来年の用意ができている」とおっしゃつたことなど、今でもはつきり覚えています。マクドエル先生とおっしゃる外人の先生の音楽リズムの時間には、レコードに合わせてひとりひとり自由

表現を行わせるなど、当時としては非常に新しいやり方だったと思います。

でも、とも角楽しくて、同級の二十人ぐらいは全部が喜んでそれぞれ就職して任地に向かいました。私は故里に近い岩国に新しくできた教会附属の幼稚園につとめることになりました。この幼稚園は教会の牧師館を改造して新しく作るということで、それこそ机、いす、手洗い場、トイレにいたるまで、一応幼児教育の専門家は私だけでしたので、すべて私が任されました。そして日曜学校に手伝いにいらしていたお嬢さんを助手に、とも角私の保育者としての第一歩がふみ出されたわけです。幼児は二、三十人でしたでしょうか。しかし家庭の事情やら何やらで、私は一年でここをやめて神戸へ参りまして、結婚いたしました。

その辺のことをちょっと申し上げますと、私の父のことをお話しませんとおわかりにならないと思います。父は、私が広島へ入ります時に大変反対したような人ですが、一方自分もやはりいなかの生活にあきたりなかつたようです。もともと動植物の好きな人です（学校は高等工業、今の東京工大を出たのですが）トマト、アスパラガスといった、当時いなかでは青くさいといつて見向きもされなかつたものの栽培から、あひるを飼い、ふ卵器を備え、ついには牛まで飼つたという人でした。そして日本国内の農業ではた

めだ、とフィリピンのミンダナオ島に渡りました。そして排日感情の激しかった現地でも手に入らず、結局はたくさんのお金を使っただけで帰国しました。そんな父に、やはり私はひかれていたのでしょうか、岩国の幼稚園をやめて、その時は父のいるミンダナオに行くつもりだったのです。

しかし当時は関西学院の先生をしておりました主人と婚約いたしました、このミンダナオ行きは実現いたしませんでした。そして婚約中に主人は熱心な伝道者であった兄を失い、そのあとをつぐべく牧師になる決心をして私に打ち明けてくれました。私はもちろん学生時代にクリスチャンになっておりましたし、賛成し、結婚いたしました。昔のことで、私の出ました女学校などでは、日曜日に教会へ行っただけで校長からヒドク叱られるというような時代でしたが、私はそのころから村の集会所へこられた有名な方のお話などがあって、ひそかにキリスト教への憧れをもっておりまして。そして広島島に入りましてクリスチャンになりましたので、牧師になった主人に従って東京へ参りました。それでも私は幼稚園の先生になりたいという夢は捨てていませんでしたので、結婚の時にも将来、できれば自分で幼稚園をやりたいということを条件にいたしました。そして最初にまいりましたのは代々木にありました千駄ヶ谷教会でした。見ますと教会の

裏にあき地があるのです。私はここを幼稚園にしたいと思ったのですが、信者の方たちの反対にあってそれは叶いませんでした。

その後、関東大震災の後に新しい家を求めてここ荻窪にまいりまして、この土地を借りて家をたてたのです。坪二銭か三銭、うそのようなお話です。そして念願の幼稚園を始めましたのが大正十五年ですから、この幼稚園は昭和と共に歩んできたわけです。

最初はもちろん認可も何もありません。五、六人から始めました。ただ後援して下さった方は、佐藤瑞彦先生、赤井米吉先生等々ご立派な方ばかりでした。佐藤先生は「無料の子どもを入れなさい、お金を出して来るようないい家の子どもばかりではいけない。精神の強いたくましい子を入れなさい」とおっしゃって下さったことが印象に残っています。

（ここで私が、「その無料のお子さんというのをお入れになったのですか？」と口をはさみますと）

初めはみんな無料でしたよ。お金なんていただけません。きてくられて、楽しく遊んで……それでよかったです。でもまあその状態はそう、いつまでつづいたでしょうか、その内にまあお金をいただくようになって……でも苦しいことは苦しいでした。税金が払えなく困ったこともあります。でもそんな時、いつもどなたか助けて下さったのです。そして開園当時はこの中だけでなし

に、中央線の線路のそばの林で遊んだり、井の頭公園、浜田山あたり、浴風園という老人ホームのあたりまで草をつんだり歩いて、帰りは電車で帰るなど、それはそれは楽しい毎日でした。

それから粘土細工をずい分いたしましたよ。今のようなくさいでなく、本当の粘土、あれはようございました。今でも私は本当に自然を大事にしています。幼稚園を始めました時に植えた桜が大きく枝をはって、今年はその赤い葉がとも見事で、子どもたちがその葉を細長い画用紙につけてインディアンごっこをしているのを見ますと、ああ長かったのだなあ、五十年という月日をしみじみと感ずます。今はよい後継者を得ましたので、私はこのへやから子どもたちの声をきいたり、姿を見たりしながら本を読んだり書き物をしております。そして毎週土曜日に子どもたちにイエスさまのお話をするにしております。神さまの大きな愛とか、奇跡とかを、どうしたら子どもにもわかるように話せるか、これが私の一週間の宿題なのです。

障子の向うは園庭、という小さなお茶室で先生は静かに、終始ほほえみながら話して下さいました。とても初対面とは思えないのは、私の母とちょうど同じぐらいのお年で未亡人となられたとうかがったからでしょうか、そして私の家にすぐ近い神楽坂には

お知合いがいらして、よくお出かけになったとか。お茶やお菓子をお運び下さった原田シヅ子先生はお茶の水の現職研究会へご熱心にご出席とかで、「もうすっかり安心」と先生も心からおうれしそうでした。もっといろいろかぎたい気持ちをお庭で写真をとらせていただいて失礼いたしました。先生は途中までお送り下さって、見えなくなるまで高く高く手をふって下さいました。私はお話の途中で、「失礼ですけど、先生はわり合に楽天家の方でいらっしゃいましょう？」とまことに失礼なことを申し上げてしまいました。いろいろなご苦勞のことを、あまりにサラッとお話しになるのでつい単純にそう申し上げてしまったのです。でも私は帰りながら、いや、とんでもないことを申し上げてしまった。先生のは楽天家と申上げるより、物事にクヨクヨしないで未来に向って常に前進なさる方なのだ、としみじみ思いました。ご自身でも、「もしこんな世の中になって、幼稚園がつぶれてしまうのなら、それもそれでいいと思っているのですよ」とニコしながらおっしゃったのです。お若いころ、勉強なさるのが楽しくて楽しくてたまらなかったとおっしゃる先生、そしてどんな苦難も来るなら来いとサラリとおっしゃる先生、私にはやはりここに中川花代先生の真価を見た、まことに心がましいのですが、つくづく思いました。(一九七五・一一・一七)